ドクターズアテンション　インタビュー

地域のニーズに応じて心のかよう高度な医療と介護を

医療法人社団育生会 京都久野病院　京都久野病院介護医療院 理事長・院長
社会福祉法人 京都育和会 理事長
久野 成人

京都久野病院は、一般病床2病棟（120床）、回復期リハビリテーション病棟1病棟（60床）、医療療養病床1病棟（55床）合計4病棟（235床）。そして介護医療院3病棟（165床）から成る病院です。他にも居宅介護支援事業所、訪問看護ステーション、小規模多機能型居宅介護施設、認知症対応型通所介護施設、認知症対応型共同生活介護施設を有し、平成30年には社会福祉法人京都育和会として高齢者福祉施設を開設、また今年は機能訓練型デイサービスと訪問介護事業を開設された久野成人理事長にお話を伺いました。

――こちらの沿革等を教えていただけますか。

昭和28年に先代（現在相談役）の久野敏人が、東山のこの地に久野医院を開設しました。40床の久野病院になったのが昭和40年、55年前のことです。社団法人育生会として医療法人化したのが昭和49年、そのうち5回の増改築工事を経て、今の形になりました。もともとは、外科・内科を中心に診療していましたが、その後交通外傷も増えてきたので整形外科を取り入れてきました。

現在、この病院の位置する東山地区は非常に高齢化が進んでいます。京都の中でも最も高齢化率の高い地域です。高齢者の方の四肢骨折や、膝痛、腰痛、脊椎圧迫骨折などの整形外科疾患の患者様が多く入院しておられます。

私は整形外科医ですが、私が医師になった頃は、若い方の交通外傷でバイクでの四肢骨折などが多かったのですが、今はバイクの事故も外傷も随分減ってきました。手術する患者さんが若いと手術の後も自ずとどんどん回復して、短期間のリハビリで退院していかれます。しかし高齢者の患者様は、手術が上手くいっても早期にきっちりとリハビリをしないと歩行能力が回復せず寝たきりになる事があります。また、患者様の高齢化によりしっかりしたリハビリの提供と、多職種の連携による退院調整もしていかないと患者様が自宅に戻ることができません。退院した後も在宅での生活を維持することが困難になってくる場合も多く、訪問介護や訪問リハビリも必要になってきたため病院で訪問リハ部門を立ち上げ退院後一定期間訪問リハで自宅生活を維持するための支援をしています。

一方、病院での治療により病状は安定したものの要介護状態で在宅復帰が困難な患者様も増えてきましたので、グループホームや特養を作り、現在の医療・介護の提供体制となったのです。

変化する地域のニーズに合わせて診療科や施設を開設していく

私たちは何をしたいか、というよりも地域のニーズに応じて何をやらなければならないかということで、診療科を増やしたり、介護施設を取り入れたりしてまいりました。最近は脳血管障害の方のリハビリがニーズとして増えてきましたので、脳外科医の先生にも来てもらって脳血管リハビリテーションに力を入れるようになってきました。リハビリも最近は休みなしで1年間365日、毎日行っています。職員も患者さんも大変ですが、対応しています。リハビリはやり溜めができませんので、毎日少しずつやっていくことが大事なのです。少しずつできることを増やしていきますので、365日が必要なのです。初めのうちは職員の理解を得ることが難しかったのですが、今はみんなが理解してくれて、頑張って日曜日でもリハビリをしています。若い人の過負荷トレーニングは筋肉を傷めますので、休ませることも必要ですが、高齢者の場合は若い人とは違います。毎日少しずつ行うことで身体機能を低下させず、維持し、さらにできることが増えていくという考え方です。訪問リハも行っていますが、それだけでは不十分なので、先般、機能訓練型デイサービスを立ち上げました。いわゆる「リハビリ・デイ」です。訪問リハや通所型のリハを駆使して、できるだけ機能が落ちないような仕組みを作っています。この施設に「ロコモーション」と名付けました。整形外科学会では、「立つ」「歩く」と云った足腰の機能が低下している状態を捉えて「ロコモティブシンドローム」と呼んでいます。1960年代にリトル・エヴァの「ロコモーション」という歌が流行りました。団塊の世代の方々が若い時に多分踊ったりしたであろう、楽しかったことを思い出していただいて、ここで機能訓練していただけたらなお効果がでるのではないかという思いでこの名前をつけました。リハビリは痛い、しんどいと思われがちですが、そうではなく、楽しく毎日ここへ来て体を動かしてくださいという願いです。

――非常にいいことですね。多分リハビリって面白くないことで続けるのが大変なことですよね。

新型コロナ感染症が発生してから家にこもるお年寄りが増えました。昨年の末ぐらいまでは杖で外来に来られていた患者様が、春にはシルバーカーになり、秋には車椅子になる。この1年間でこのような患者様が増えています。新型コロナ感染症の影響は大きいと思います。外に出たいけど怖い、家族からは外に出ないように止められる。家の中にいて足が弱ってフラフラになってしまわれる方が増えたのですね。こんな機会に、是非「ロコモーション」をご紹介したいと思います。ストレッチやバランス感覚向上のためのレッドコードや、使わなくなった筋肉を活動させるパワーリハビリを中心に、理学療法士が身体状況の確認と評価をして訓練を行います。送迎付きで利用時間は3時間、10月にオープンして、現在お試し期間中です。

今までリハビリテーションというのは病院や施設の中で、リハビリをして自宅に復帰するということでしたが、それだけでは不十分だということです。どうしたら在宅に留まっていただくことができるか。地域包括ケアの中で在宅に留まっていただくためには、我々が在宅に出向いていく、あるいは通所施設を利用していただくことが必要です。病院の中で診察をしているだけでは、地域のニーズに応えることはできないのではないかということを今、感じています。

患者様が無理なく過ごせる施設を提供したい

この病院の横には「レット・イット・ビー」と名付けた高齢者福祉施設があります。地域密着型特別養護老人ホーム（ショートステイ併設）が中核になっていますが、小規模多機能型居宅介護や認知症高齢者グループホームも併設しています。地域の方々のニーズに応えられるようにしています。これも1970年代のビートルズの楽曲から名前をもらいました。後期高齢者になられる団塊の世代の方々が若い時に口ずさんだり耳にした音楽を思い出していただけたらと思っています。直訳しますと「あるがままに」ですので、お年寄りが今までの生活をそのままに過ごしていただける施設になるといいなという願いです。

――患者さんの側に立った発想ですね。

医療とは関係ありませんが、音楽というのは我々の頭の中で普遍性があります。その音楽を聞くと、何十年前に流行った当時の自分のイメージが思い出され、その時の自分がこういうシチュエーションでこの音楽を聞いていたなと思い浮かばれて元気になりますよね。そんな思いです。

病院を中心に数分以内のところにいくつかの入所系施設がありますので、訪問系のものと組み合わせながら、この地域にどうやって貢献していくか、地域包括ケアをどうやって確立していくかと模索しているところです。

当院としては、地域急性期疾患の対応から回復期医療（リハビリテーション及び慢性期医療を3本柱に、在宅復帰に至る継続的な支援を行い、高齢者の方が安心してこの地で暮らしていただけるように医療や介護を提供したいと考えています。また昨年12月に転換した生活施設としての介護医療院のあり方も考えていかなくてはならないと思っています。その位置付けが今後の課題です。

医療法人社団 育生会 京都久野病院

レット・イット・ビー

機能訓練型デイサービス ロコモーション

◆久野 成人 プロフィール

医療法人社団 育生会 京都久野病院 理事長・院長
社会福祉法人 京都育和会 理事長
京都私立病院協会 副会長
京都府慢性期医療協会 副会長

専門領域　整形外科
資　　格　日本整形外科学会 整形外科専門医
　　日本医師会認定産業医
表彰（個人）　2011年度 京都府救急医療功労者表彰
　　2012年度 公衆衛生事業功労者表彰
　　厚生労働大臣表彰